

*当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors

共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」

(平成 26 年度第 2 回研究会)

日時 2014 年 11 月 23 日 (日) 14:00-18:00

場所 AA 研マルチメディア会議室 (304)

報告 1

鴨野洋一郎 (AA 研共同研究員、関東学院大学)

「フィレンツェ商人とオスマン帝国—二つの織物会社の事例から—」

本報告ではイタリアを主要な研究対象とする報告者がこれまで研究してきた内容を、共同研究課題である近世イスラーム国家（本報告ではオスマン帝国）と周辺世界（本報告ではフィレンツェ）とのかかわりに着目しつつ報告した。

本報告は、1. 中世後期～ルネサンス期フィレンツェ経済の展開、2. フィレンツェ商人と東地中海、3. 史料、4. 二つの織物会社、の 4 部で構成された。まず 1 では、13 世紀から 16 世紀にかけてのフィレンツェ経済の展開を国際商業・金融業および繊維工業を軸に概観した。つぎに 2 では、フィレンツェ商人と東地中海世界との経済的関係の歴史をまとめ、この歴史の中にフィレンツェ・オスマン貿易を位置付け、その経済史的な意義を確認した。この貿易はフィレンツェで毛織物を製造しつつそれを国外で販売する「貿易する織元」の成長を促し、また輸入するペルシア生糸によって絹織物工業を成長させた点で重要な意義をもっていた。そこで 3 では、この貿易の実態を調査するために利用できる経営記録などの史料を解説し、4 では「貿易する織元」の一例として、星野秀利がかつて紹介したグワンティ毛織物会社を取り上げ、また比較のために絹織物を製造しその一部をオスマン帝国で販売したセッリストリー金箔会社も取り上げ、両者が行ったオスマン貿易の詳細を検討した。検討の結果、さまざまな規模の会社や商人がオスマン貿易にかかわり、またこの貿易が比較的小さいながらも安定した利益をもたらしていたと結論付けた。

報告の最後にまとめとして、中世後期からルネサンス期にかけてのフィレンツェがヨーロッパ＝地中海世界を舞台に広範な商業活動を行っていたこと、またこの活動において毛

織物や絹織物といった繊維製品が重要な役割を担っていたこと、そしてフィレンツェ・オスマン貿易がこうした繊維製品の取引と密接に結びついていたことを述べた。さらに本報告で取り上げた二つの織物会社から、ルネサンス期フィレンツェでは繊維工業と国際商業との一体化が見られたことを確認した。

本報告で事例として取り上げたような東地中海における織物を通じた経済交流は、近世に入っても活発に続けられる。その交流は、近世イスラーム国家と周辺世界との交流でもあったといえることができる。

(鴨野洋一郎)

報告 2

黛秋津 (AA 研共同研究員、東京大学)

「18 世紀後半のオスマン帝国のワラキア・モルドヴァ支配ーロシアの黒海・バルカン進出との関連で」

本発表では、イスラーム国家と周辺世界との関係を探る一つの手がかりとして、帝国のいわゆる「付庸国」に焦点を当て、その具体例として、オスマン帝国に従属するワラキア公国、およびモルドヴァ公国を取り上げて検討した。16 世紀までにオスマン帝国に従属したとされるこの二つの公国であるが、史料の上では、法的に「イスラームの家」には含まれないとされた。しかしながらこの両公国に関しては、オスマン帝国と諸外国との間に結ばれたような、具体的諸関係を規定する条約 (ahdnâme) はおそらく存在せず、またオスマン政府も現地住民を明確に臣民と見なしているなど、法的側面と実態面が必ずしも一致していなかった。こうした曖昧な両公国とオスマン帝国中央との関係は、オスマン帝国がヨーロッパに対して優位を保っていた 17 世紀まで、近隣諸国との間で問題とはならなかったが、18 世紀後半にロシア、ハプスブルク、その他の列強がバルカンへ進出を始める際に問題化する。すなわち、1774 年のキュチュク・カイナルジャ条約により、ワラキアとモルドヴァに関する発言権など、いくつかの権利を得てバルカン進出を開始したロシアが、その足掛かりとして両公国を位置付け、オスマン帝国中央と両公国との関係に干渉を行ったのである。ロシアは、それまで具体的な規定がなくオスマン帝国中央がある程度自由に決定していた両公国との曖昧な関係を、明文化してそれをオスマン政府が遵守することを求めた。これがその後、オスマン帝国とロシア、およびハプスブルクとの間の外交文書の中にオスマン＝両公国関係に関する規定が盛り込まれる、さらにオスマン政府が初めて両

公国に対してカーヌーンナーメを定めるという動きをもたらすことになった。これにより、オスマン帝国中央のワラキア・モルドヴァに対する権利とその要求には枠がはめられ、その余地にロシアおよび他の西欧諸国が影響力を伸ばしてゆくことになる。

このように、オスマン帝国というイスラーム帝国の周縁に位置し、周辺諸国と境を接していた「付庸国」ワラキア・モルドヴァは、近代移行期に、中央＝周辺関係の規定の明確化と帝国中央による権利要求の制限、そしてその関係への諸外国の関与というプロセスを経て、ヨーロッパ諸国の影響を強く受けるに至った。イスラーム帝国の周縁に位置し、多くの場合中央に緩やかに統治される、こうしたいわゆる「付庸国」やそれに準ずる領域の存在は、イスラーム国家と周辺世界との関係を考える上で重要な問題の一つと考えられ、今後、事例の比較などを通じてさらに検討がなされるべきであろう。

(黛 秋津)